

近松の代表作、
大坂初演から334年。
燕三版でついに東京初披露！

5/29(水)
14:00開演
友の会優先発売 3/5
一般発売 3/7

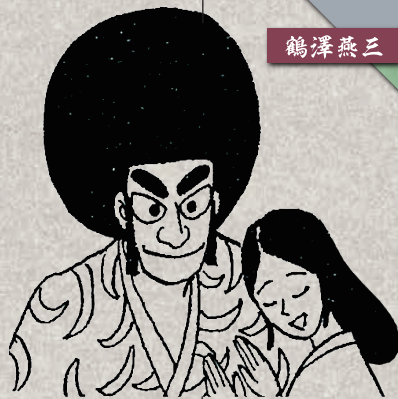
近松門左衛門 作
鳥越文藏 発意・監修
鶴澤燕三 作曲

出世景清 素浄瑠璃公演

貞享2年(1685)大坂竹本座で初演された『出世景清』は竹本義太夫に対して近松門左衛門が初めて書き下ろした作品で、義太夫節の人気を決定付けました。文楽では初演以来実に333年間ほとんど上演されませんでした。渡辺保氏の寄稿によると、『出世景清』は近松と竹本義太夫が提携した最初の作品であり、いわゆる中世以来の運命を描く古浄瑠璃と新しい近代的な人間を描く新浄瑠璃の分岐点としても演劇史上有名な作品である。近松はこの『出世景清』以後『曾根崎心中』をはじめ多くの名作に

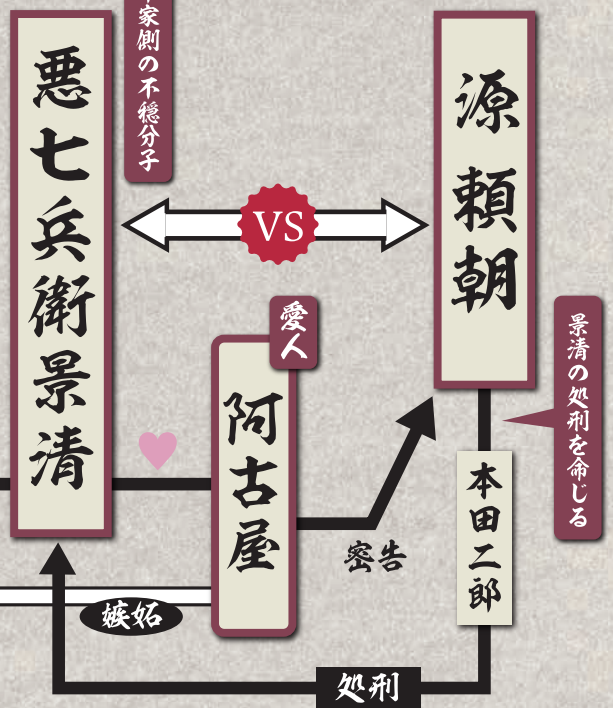
よって、中世の物語から抜け出し今日的な人間ドラマを描いた「きわめて歴史的な作品です。」
この作品は全五段で構成されています。源平時代、阿古屋(景清の愛人)が小野の姫(熱田大宮司の娘で景清の妻)への嫉妬のあまり、平家滅亡後不穏分子として指名手配されていた景清のありかを密告し、そのために牢に入った景清に責められて、子ども2人とともに自害します。その後死刑になったはずの景清は、清水寺の観世音が身替りになって助かるというものです。歌舞伎に詳しい方ならお気づきかも

しれません。小野の姫の責め場と阿古屋の人間の苦悩は後に『壇浦兜軍記』に「阿古屋の琴責」として描かれ、景清の牢破り、清水観音の靈験譚、景清の両目抉り、日向への下向という後半の筋は、歌舞伎の景清物の一大系譜をなすなど、歌舞伎や浮世絵に大きな影響を与えました。
今回は作品の話を渡辺保・葛西聖司両氏の対談でご堪能いただき、



人物相関図「抜粋」

全五段から阿古屋が嫉妬に狂う阿古屋住家の段、死刑になったはずの景清の首が観世音に変わる観世音身替の段、景清が頼朝と対面して自ら両目を抉り、日向へ下向する清水寺の段をお届けします。前述の渡辺保氏に「人間がこの世を生きたために政治や戦争では解決ができない。それを超えるのが信仰であり思想である。そう思わせたところが今度の舞台の普遍性であり、現代性である」と言わしめた本作品をお聴き逃しなく！



処刑したはずが...!?